

子どもの幸せにつながる吃音臨床 —ナラティブ・アプローチの展開—

日本吃音臨床研究会 伊藤伸二

0 誇っていい、日本のことばの教室の実践

アメリカは吃音症状の治療・改善にこだわるため、言語聴覚士の96%が吃音の臨床に苦手意識をもつ。日本は、治せなくても、なすべきことはあると、子どものレジリエンス(回復力)を育てる。

1 吃音治療の歴史を知る

1903年 「不自然でも、どもらずに、ゆっくり話す」

1930年代、アメリカのアイオワ学派は、従来の技法を厳しく批判し、随意吃音を提案。その後、「どもらずに話すアプローチ」と「楽にどもるアプローチ」が激しく対立。

1970年 ジョゼフ・G・シーアンの吃音冰山説

1974年 伊藤伸二 吃音を治す努力の否定 後に 吃音者宣言

1990年 統合的アプローチ ・弾力的発話速度・構音器官の軽い接触・軟起声・固有受容感覚

2 吃音に劣等感をもつことで起こる問題 「吃音否定の物語」が人を苦しめる

吃音を否定的にとらえ、劣等感をもつことで初めて、シーアンの冰山説の海面下の問題が起こる。

〈行動〉吃音を隠し、話すことから逃げ、消極的になっていく

〈思考〉「どもりは悪い、劣った、恥ずかしいもの」「どもっていても有意義な人生は送れない」

〈感情〉不安、みっともない、恥ずかしい、恐ろしい、情けない

〈身体〉緊張して話すとき硬直してしまうからだ、人と触れあうのを拒むからだ

吃音冰山説の海面下の部分を二次障害や病的なもの、吃音シンドロームと考えない。吃音に悩む人の誰にも起こること。自らが選んだ行動、思考のパターンだから、問題に気づけば変えることができる。

WHOのICFの前の障害の定義は、①機能障害 ②能力障害 ③社会的不利 吃音をネガティブにとらえなければ、機能障害があっても、能力障害はなく、社会的不利になることもない。

3 幼児吃音の臨床と環境調整とDCモデルとリッカムプログラム

「流暢性は、環境の側、話し手自身が自らに課した Demands(流暢に喋るようにという要求、指示、命令、プレッシャー)が、話し手の認知的、言語学的、運動的あるいは情緒的な Capacities をある程度以上越えた時に崩壊する」は、原因論としてはともかく、親と子どもの関わりを考えるのには役立つ。

リッカムプログラム 「環境調整」重視の幼児吃音の臨床から転換し、直接的に言語指導をする。親は「ゆっくり話す」モデルになり、どもったら言い直しをさせ、どもらずに言えたら褒める。「かめさんことば」など、ゆっくり話す練習は、100年前に戻ったようだ。

4 ヒーリー教授の「CALMSモデル」(2011年12月、大阪の講演会に参加)

- | | |
|----------------------|----------------------------------|
| 1) 認知領域(Cognitive) | どもる瞬間に気づく能力・考えや心配・他者の反応・吃音の知識と理解 |
| 2) 心情領域(Affective) | 自己肯定感・吃音に対する態度や感情・他者の反応に対する感情 |
| 3) 言語力領域(Linguistic) | 吃音と発話の長さ・全体的な言語能力・構音語想起、語彙能力 |
| 4) 発話技能領域(Motor) | 吃音の特徴・頻度、時間、二次的な対処行動・発話調節の臨床的印象 |
| 5) 社会的領域(Social) | 場面・単語・相手・教科外活動・友人関係に対する吃音の頻度と影響 |

5 私がことばの教室担当者だったら

1) 吃音の検査はしない。検査は無意味で、弊害の方が大きい。

ジャックと豆の木、日本音声言語医学会検査法、ICFやCALMSモデルの評価などは、子どもの問題の原因探しになり、吃音否定の物語が強化される。

2) 吃音を治す・改善する・コントロールするなどの言語訓練はしない。難しいだけでなく役に立たない。「随意吃音」ウェンデル・ジョンソンの吃音が悪化した危険な方法。「ゆっくり、そっと、やわらかく」の統合的アプローチ程度は、他人から教えられなくても子どもは知っており、使っている。

3) 吃音は自然に変化していくものと考え、自然な変化に委ねる。

言語訓練の効果が判定は難しく、エビデンス・ベースドは吃音にはなじまない。変化は日常生活中で起こる自然治癒が多い。免疫力のような、自己変化力によって起こる。一時的にあまりどもらなくなっても、高校生、大学生、社会人になってどもるようになることも多い。あまりどもらなくなると、「どもれない悩み」をもつ人は実に多い。吃音の変化は、生涯をかけて起こる。

4) 吃音の知識や情報は、事実を正直に率直に子どもや保護者に話す

原因が分からず、治療法がなく、治らないこと。人口の1%程度いること。どもる人の職業。吃音の治療法の効果と限界について説明し、その上で、吃音にどう取り組むか、子どもと相談する。

5) 初回面接のとき、小学校1年生にも、なぜことばの教室に来るのか、吃音について話す。

6) 子どもと何かに取り組むとき、それをなぜするのか、子どもにも保護者にも説明する。

7) 言語指導に関しては小さな援助を、レジリアンスには大きな援助をする。

8) 日本語の発音・発声の基本について教え、一緒に声を出すことを楽しむ。日本語はひとつの息の流れ、一音一拍、子音と母音を同時に言う。日本語の特徴を学び、身につけるために、童謡・唱歌と一緒に歌い、子どもの好きな詩や芝居のせりふ、和歌や短歌や俳句、カルタ、百人一首を楽しむ。

9) ウェンデル・ジョンソンの言語関係図やシーアンの吃音氷山説を使って、吃音をマイナスにとらえることで起こってくる問題について学習し、取り組む。たとえば言語関係図のY軸聞き手の反応の軸が長ければ、子どもにとって、クラスをよりよい環境に自分の力で変えていくよう手伝いをする。

10) ナラティヴ・アプローチの会話術を使って子どもと対話をし、「吃音否定の物語」を「吃音肯定の物語」に変えていく。英国王のスピーチがいい教材になる。

11) アドラー心理学の子育ての目標である、共同体感覚を育成する。

12) 笑いとユーモアについて学ぶ。

13) 子どもの生き抜く力、レジリアンスを育てる。3.11の津波で多くの子どもが逃げ延び、「釜石の奇跡」と呼ばれた防災教育のように、どもって失敗した時、どう立ち直るか、いじめやからかいに合ったとき、どう向き合い、サバイバルしていくか、吃音を生き抜く力を育てる。

14) どもる子どもの力を信頼し、尊敬する。

どもる子どもは、精神的・情緒的な脆弱性、対人不安傾向が特にあるわけではない。吃音を否定することで起こる、話す場面に限定される。子どもは弱い存在だと決めつけない。

15) 自分以外のどもる子どもたちとの出会いをつくる。グループ指導の意義は大きい。